

編集者の奇妙なこだわり

柴崎昭則

私が会社勤めをはじめたのは、通信社の出版部門だった。出版などというと、多くの人は「午後から入社して夜中まで仕事。でも、有名人に会えたり、会社のお金で飲み食いできたりしてすごく、「おいしい」なんてイメージを持っていかもしれない。確かに週刊誌や月刊誌を出しているような大手出版社であれば、そうしたイメージ通りの生活だったのだろう。しかし私が勤めた会社は、華やかさとは無縁だった。入社時刻は午前九時（一年後に午前九時三〇分になった）、認められる経費も交通費と打ち合わせのお茶代くらいのもの。「お堅い」会社だったのである。

出版のことをまったく知らずに就職したため、職場ではカルチャーショックの連続だっ

た。最初に驚いたのは、職場の片隅に積み上げられた書籍や雑誌の山だ。一〇冊（あるいは二〇冊）ごとに梱包されて無造作に置かれた自社の出版物。私は、自分自身の立場が単なる「読者」（受け手）から「編集者」（送り手）へと変化したことを知った。ここで、「よし、やるぞ」と気合いが入れば、「よき編集者」になれたのだと思う。しかし正直なところ、積み上げられた出版物を前にした私は、何か奇妙な違和感を感じていた。朝の明るいう陽射しの中、人気がない歓楽街に立ちつくす場違いな自分、といった感覚を。

編集者の実務にしても、「変だなあ」と思うことばかりだった。読者にはあまり関係のないような妙なこだわりが多いのだ。

編集者は、ページに余白ができることを嫌う。特にページごとにレイアウトが決まっている雑誌などでは、たとえ一行であっても余白は許されず、ページのおしまいまでピツタリと文字が組まれていなければならない。

あなたが読んでいるこの見開きページについて考えてみよう。一行は二〇字詰め。タイトルと執筆者名に三〇行、本文に一二〇行が割り当てられている。原稿を依頼するときは必ず、「二〇字×一二〇行で」と原稿分量を指定するのだが、実際には上がってきた原稿が一七行しかなかったとする。そんなとき編集者は、さまざまなテクニクを駆使して強引に三行増やすのだ。

このテクニクが実に涙ぐましい。まずは

各段落の最後の行をチェック。行末付近まで文字が入っていれば一行増やせるかもしれない……というわけで、そんな段落を見つけたら、①読点を増やす、②一つの段落を二つに分ける、③言い回しを長くする——といったやり方で行数を増やしていくのである。

編集者は原則として、原稿を「断りなく」直せない。文章は——たとえどんな文章であっても——執筆者の思想・信条の表明であるからだ。しかし編集者としては「見栄え」も気になる。そこで「行数調整しておきますので、著者校正のときに確認してください」と断りを入れつつ、こうした作業を行う。もちろん、原稿が指定した分量通りであればこんな作業は不要のだが、指定通りに書いてくる執筆者は数少ない。

もう一つ、「表記の統一」も編集者ならではのこだわりだ。特に新聞・通信社には、言葉の書き表し方についての基準がある。「コンピュータ」ではなく「コンピューター」、「ソフトウエア」ではなく「ソフトウェア」、「高嶺の花」ではなく「高根の花」、「情況証拠」ではなく「状況証拠」……といったように、実に細かく決められている。

私が勤めていた職場は外部執筆者の原稿を

扱うことが多かったから、こうした基準を厳密に適用していたわけではない。しかし「統一」は不可欠だった。「言う」と「いう」、「見る」と「みる」、「時」と「とき」……。

「表記はこちらで統一します」と執筆者に断った上でどちらに統一するかを決め（たいていは多く使われている方に統一した）、その方針にしたがって修正する。当時はパソコンなどなかったから、地道なメモと記憶力だけが頼りだった。

ところが、どんな方針を立てても例外は発生する。数字の表記を考えてみよう。縦書きの場合、新聞・通信社では「二〇一二年十一月三十日」のように書くのが基本だ（一部の新聞社では算用数字を使って「2012年11月30日」と書く）が、この書き方自体、すでに例外を抱え込んでいる。なぜなら、位を表す漢数字「十」を、月と日で使っているのに西暦年では使っていないから。例外をなくするには、①二〇一二年一月三〇日、②二千十二年十一月三十日——のどちらかにしなければならぬ。①を採用すると、今度は別の例外が発生してしまう。「じゅうすうばい」とか「すうひやくにん」をどう表記するか、という問題だ。「十数倍」か「一〇数倍」か、

「数百人」か「数一〇〇人」か——こんな堂々巡りの議論を、編集者は真剣に考えなければならぬのである。

一つの職業を長く続けていると、その職業特有の感じ方や考え方が染みついてしまう。自分では意識していなくても、その職業「らしい」人間になるわけだ。私自身、編集者として訓練された結果、ページの余白はない方がきれいだと感じ、表記の統一はするべきだと考えるようになった。ただ、最初に抱いた

「変だなあ」という感覚を忘れたことはない。一日の大半を編集者として過ごすとは違って、私は、編集者である以前に「私自身」なのだ。私自身が抱いた素朴な感情——「変だなあ」——を捨ててしまったら、私が私でなくなってしまう。

生きていくために仕事は必要だが、自分をなくしてまでやらなければならない仕事などほとんどない。振り返ってみれば、山のようには積み上げられた出版物を前にして感じた違和感は、私にとって、編集者という仕事に対して一歩離れた見方をするきっかけだった。おかげで「よき編集者」にはなれなかったが、「よりよき自分」になるためのきっかけにはなった（かもしれない）、と思っている。